

106名医学士誕生

第92回 卒業式

令和2年度大阪大学卒業式が3月24日行われた。大阪城ホールでの式典は、昨年は

COVID-19感染症の拡大に伴い中止されたが、本年は感染に十分気をつけながら

挙行された。西尾章治郎総長による式辞では、「未曾有のコロナウイルス感染症の中、



第259号

公益社団法人
医学振興
銀杏

(編集同人)

萩原俊男 朝野和正
米田正太郎 木村典正
杉本央 森井英一
富田尚裕 日比野幸
上田啓次 馬場幸子

安全と安心な社会ということがよく言われる。安全は客観的に示すことができるが、安心は受け取る側の主観による。大阪大学で学んで得た専門性は、皆さんが思っている以上に狭いかもれないが深いものである。この専門性を大いに利用し、皆さんの周囲の社会をぜひ誰からも安心だと思われ社会に変えていただきたい。」と結ばれた。

また、医学部医学科卒業式が同日午後3時より行われ、本年度106名の新医学士が誕生した。昨年は4個の講堂に分かれて行うという異例の卒業式だったが、本年度は大阪大学活動基準に従い、全員がA講堂に集まることのできた。森井英一医学部長より一人一人に学位記が授与され、「昨年と異なり今年は今全員がA講堂に集まることのできた。どういう行動で感染確率を下げられるかというエビデンスの積み重ねの結果、今年一同に会している。世間で言われることに疑問をもち科学的な視点で検証することが重要である。皆さんは過去に学び、現在を正しく認識し、そして未来に自らの力を十分に発揮し医療と医学を牽引してほしい。」と激励された。土岐祐一郎医学部附属病院長は、「いよいよ社会人として医療現場に出る時で、学生時代からのソフトチェンジが必要である。医療現場ではつらいことも多い。そのような時は先輩や友人などを頼りに乗り切ってもらいたい。」と祝辞を贈られた。最後に、吉川秀樹医学振興銀杏会(学友会)理事長が祝福の言葉を述べられ、学友会からのお祝いを卒業生に送られた。理事長は、「医師というのは、厳しい職業であり、時には損をすることももあるし、犠牲になることもある。治療がうまくいかない時もある。患者さんから不満を訴えられる時もある。そのような時、「人生逃げ場なし」という強い気持ちを持って、決して逃げることなく、真摯に立ち向かって欲しい。」と激励の言葉を述べられた。

令和2年度「楠本賞」は佐村和紀君にその栄誉が贈られた。また、令和2年度博士課程優秀者として8名にその栄誉が授与され、学部学生の佐田直基君、竹内太郎君、水野彰君に「山村賞」が贈られた。

MD研究者育成プログラム修了者13名も認定を受けた。

総会及び関連行事中止のご案内

5月29日(土)開催の総会は書面で開催致します。代議員各位には、議案書等を送付させていただきます。また、懇親会は中止となりました。

医学系研究科長就任のご挨拶



熊ノ郷 淳 (平3)

医学においても臨床医学においてもその取り巻く環境は大変厳しい状況にあります。学内においても、部局評

価、外部資金獲得、優秀な学部・大学院生の確保など様々な対応や改革が求められています。また、直近の課題だけでなく、急速な変容を遂げる研究手法や医学のニーズ、さらに、ポストコ

ロナ・アフターコロナとして今後どのように対応していくか、その中で、如何にして途切れることなく人材育成、研究を継続・発展させるか、未来を見据えての柔軟な対応が必要な時期と認識しております。

研究においては、生命現象の本質・真髄を見据えた研究、臨床研究やT/R研究においても骨太でそこから新たな基礎研究に発展し病因・病態の真の解明に繋がるような研

究を目指すことが大切です。そこを目指してこそ、あとに残る研究、次につながる研究が生み出されると思います。阪大医学部・医学系研究科が引き続き、国内外でのプレゼンスを発揮していくためには、つまるところ、アカデミアの世界ですから、阪大医学部にどんな先生方が教授としておられるのか、個々の先生方がどれだけ良い研究をしているか？ 研究力あつてこそ、その発言や発信、要求・要望も、説得力を持つものと思っております。そのために、歩みを止めない組織の新陳代謝、活性化、新しい研究テ

このたび、医学系研究科長に選出頂きましたこと大変重く受け止め、阪大医学部・医学系研究科の更なる発展のために尽くして参る所存です。現在我が国の医学界は、基礎

得、優秀な学部・大学院生の確保など様々な対応や改革が求められています。また、直近の課題だけでなく、急速な変容を遂げる研究手法や医学のニーズ、さらに、ポストコ

ロナ・アフターコロナとして今後どのように対応していくか、その中で、如何にして途切れることなく人材育成、研究を継続・発展させるか、未来を見据えての柔軟な対応が必要な時期と認識しております。

研究においては、生命現象の本質・真髄を見据えた研究、臨床研究やT/R研究においても骨太でそこから新たな基礎研究に発展し病因・病態の真の解明に繋がるような研

究を目指すことが大切です。そこを目指してこそ、あとに残る研究、次につながる研究が生み出されると思います。阪大医学部・医学系研究科が引き続き、国内外でのプレゼンスを発揮していくためには、つまるところ、アカデミアの世界ですから、阪大医学部にどんな先生方が教授としておられるのか、個々の先生方がどれだけ良い研究をしているか？ 研究力あつてこそ、その発言や発信、要求・要望も、説得力を持つものと思っております。そのために、歩みを止めない組織の新陳代謝、活性化、新しい研究テ

究を目指すことが大切です。そこを目指してこそ、あとに残る研究、次につながる研究が生み出されると思います。阪大医学部・医学系研究科が引き続き、国内外でのプレゼンスを発揮していくためには、つまるところ、アカデミアの世界ですから、阪大医学部にどんな先生方が教授としておられるのか、個々の先生方がどれだけ良い研究をしているか？ 研究力あつてこそ、その発言や発信、要求・要望も、説得力を持つものと思っております。そのために、歩みを止めない組織の新陳代謝、活性化、新しい研究テ

史料館建設工事

2019年に医学伝習150周年を迎えるにあたり、医学系研究科では記念事業として3つの事業が展開されました。医学伝習150年史の発刊、記念学術シンポジウムの開催、そして医学史料展示施設の整備です。150年史の発刊、シンポジウムの開催は終わり、残る事業として医学史料展示施設の整備計

画が進められています。現在、銀杏会館1階に医学史料展示室があり、そこでは中之島時代の医学史料が主に展示されています。吹田キャンパスへ

者さんを救っている薬剤も開発されました。ところが、吹田へ移転してからの医学系研究科の歴史を物語る施設はこれまでもありませんでした。そこで、吹田へ移転してからの歴史をまとめ、現在、世界の医療を牽引している未来医療へとつながる研究成果の流れを示す史料館が計画されています。同窓会員の皆様からの

ご寄附に加え、ブロックバスターの生みの親で、医学振興銀杏会の前理事長である岸本忠三先生からも多額のご寄附をいただき、この度、銀杏会館横のスペースに3階建ての史料館が建築される予定です。

医学部附属病院の建て替えに伴い、銀杏会館のすぐ傍まで患者さんの駐車スペースが広がりました。これに伴い、患者さんがアプローチしやすい場所に、附属病院で行われ

ている未来医療、そして現在多くの患者さんを救っている医薬品へつながる研究成果を示す史料館があることは意義深いと考えます。患者さんがそこに来れば癒しを感じられ、それと同時に自分が受ける医療の源となる医学研究の歴史を知ることのできる空間になればと思っております。展示スペースを1階に、市民公開講座などにも対応できるセミナールームを2階に設ける予定です。完成(2022年

森井英一(平4)

<受賞> 日本学術振興会賞 岡田随象(平17・東大医)
日本学士院賞 岩井一宏(昭60・京大医)

寄 附 御 礼

令和2年11月18日から令和3年4月6日までに、20,167,000円のご寄附を頂き、誠に有難うございました。公益社団法人への移行に伴い、平成23年4月1日より当会へのご寄附は個人・法人とも税金控除の対象となっております。詳細に関しては、事務局までお問い合わせください。

江部高廣先生(阪大医・昭35)より、20,000円をご寄附頂きました。

岸本忠三先生(阪大医・昭39)より、20,000,000円をご寄附頂きました。

吉川秀樹先生(阪大医・昭54)より、100,000円をご寄附頂きました。

3名の会員様より、金一封をご寄附頂きました。

大阪大学同窓会連合会より、17,000円をご寄附頂きました。

公益目的のご寄附について

会員の先生方には平素より当会事業へのご理解、ご支援をいただき、ありがとうございます。当会は公益法人として、会員の先生方からの会費収入はもちろんのこと会員の先生方をはじめとする篤志家からのご支援(ご寄附)を原資として事業を行っております。

ご寄附は当会が公益事業を安定して遂行するために重要であることはいまでもございません。昨年度は、61件のご寄附を賜りまして誠に有難うございました。これまでにいただいたご寄附は、医学伝習に関する歴史と伝統を学ぶ研修事業、学生や若手研究者への奨学金・研究助成、地域医療シンポジウム、学友会会誌(学術誌)などに活用させていただいております。事業の運営と共に、広く多くの方々からご寄附をいただいているという実績が当会の公益法人としての存在価値を示すことになり、ひいては大阪大学医学部学友会のステイタスの向上にもつながります。

(ご寄附を検討くださいます先生方へ)

このたびお送りした郵送物の中に、先生方の現況をご確認する部分がございます。そこに寄附関係書類の送付希望という個所がありますので、「」の部分にチェックをつけていただき、印字内容(現況)を確認・訂正の上、ご投函いただけましたら、おって事務局よりご寄附関係の書類をお送り申し上げます。ご寄附の種類や手続き方法、税控除内容などにつきお読みいただいたうえで、ご支援を検討いただけますので、ぜひご利用ください。(書類の送付をご希望されましても、それだけではご寄附のお申込みにはなりません)

ご寄附額は随意で、ご寄附された方には税制上の控除をご利用いただけます。さらに寄附者のご意向を伺ったうえで、寄附者名や寄附金額等を「学友会ニュース」等に掲載するとともに当会の規定に基づいて理事長からのお礼状、感謝状等を贈呈しております。

趣旨ご賢察のうえ、今後とも当会事業へのご理解、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

医学部1年生を対象とした医学史講義および適塾見学会は、本年は4月10日(土)開催予定でしたが、COVID-19の急速な拡大のため急遽延期となりました。

トピックス

間葉系細胞の混沌を 解きほぐす

これまでの医学研究の対象は、形態で明確に区別できる上皮細胞、血管内皮細胞、筋肉、骨や、血液細胞が中心で、これらの間を埋める間質の細胞は、線維芽細胞や間葉系細胞と呼ばれ、特性がよくわからない細胞群でした。間葉系細胞のうち長い細胞突起を持つ細胞は細胞網細胞と呼ばれ、骨髄に多いことが知られています。一方、免疫担当細胞を含む血液細胞の大部分は、骨髄のみで造られますが、それを説明する骨髄環境は混沌としていました。骨髄では1970年代に全ての血液細胞を生み出す造血幹細胞と接着し、維持する特別な微小環境の存在が想定され、ニッチと呼ばれるようになりました。同じ頃、Dexterが試験管内で好中球を数ヶ月間維持する骨髄の付着系細胞の培養に成功し、その細胞表面蛋白質が解析されましたが、特異的に発現する分子は見つかりませんでした。私たちは、1990年代より骨髄微小環境の混沌に立ち向かい、近年、その実体が判明しました。免疫学で重要なB細胞に注目したことが幸いし、1994年に見出したサイトカインCXCL12がB細胞

の産生に加えて、造血幹細胞の維持にも必須であることがわかりました。次にCXCL12遺伝子座に蛍光蛋白質(GFP)遺伝子を挿入したマウスを作ることで、CXCL12を高発現する細胞(CAR細胞)の組織での観察と分離が可能となり、長い細胞突起を持つことがわかり、ジフテリア毒素受容体遺伝子を挿入し生体内で特異的に欠損させることで造血幹細胞ニッチを構成することを証明しました。さらに、CAR細胞は、ニッチの形成に必須の転写因子Foxc1とEbf3を特異的に発現すること、その一部が骨芽細胞と脂肪細胞に分化する骨髄特異的な間葉系幹細胞であることが判明しました。

一方、米国のKaecherらは1996年に転写因子Foxl2を同定し、腸管でのFoxl2発現細胞が長い細胞突起を持ち、Wntを発現して腸管上皮幹細胞ニッチを構成する間葉系細胞網細胞であることを2018年に証明しました。血液細胞と腸管上皮細胞というターンオーバーが活発な細胞種で、共に機能分子に注目した研究で幹細胞ニッチを構成する組織特異的な間葉系幹細胞生物學

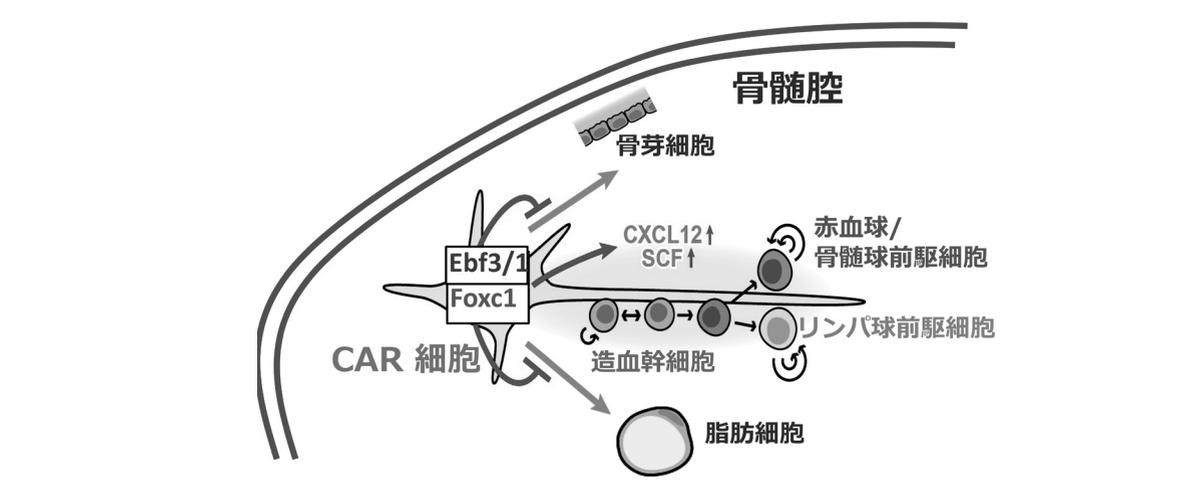


図 造血の司令塔として働く間葉系細胞網細胞 (CAR細胞)

長澤丘司(昭62・名大医)

提

言

昨年10月、第25期日本学術会議会員候補者6名の任命が見送られた。これまでに、日本医学会連合をはじめ多くの学術団体からこの事態を憂慮する声明が出されている。一方、政権側からは、日本学術会議(日学)には以前より課題が多く、改革が必要等と意見が出されているが、明確な拒

否の理由の説明はなされていない。そもそも、日学は、太平洋戦争に突入し敗北した反省から設立されたもので、第1回日学総会(1949年)の「日本学術会議の発足にあつての科学者としての決意表明」では、「これまでわが国の科学者がとりきたつた態度について強く反省し、今後は、科学が文化国家ないし平和国家の基礎であるという確信の下に、わが国の平和的復興と人類の福祉増進のために貢献せんことを誓うものである。」と謳われている。また、日本

学術会議法第3条では、日本学術会議は独立して科学に関する重要事項等を審議し、その実現を図る職務を行うことになっている。今回の任命が認められなかつたのは、第一部(人文・社会科学)所属の候補だけで、その理由は明らかでない。この事態をどのように考えるべきであろうか。啓蒙思想家ル

問われているのは学問か、

民主主義か？

つたのは、第一部(人文・社会科学)所属の候補だけで、その理由は明らかでない。この事態をどのように考えるべきであろうか。啓蒙思想家ル

なら「徒党を組むなどのことがなければ」、わずかの相違がたくさん集つて、つねに「一般意志」が結果し、その決議はつねによいものであるだろう。

個々人の意志である「特殊意志」とその総和である「全体意志」とは別に、「一般意志」がある。前者二つには共に私

の利益を求める心があるが、後者には公共の利益のみを旨ざしており、その限り常に正しいと言っている。主権も法も政府も「一般意志」から導き出され、それによって審判される。従つて、「一般意志」が最高決定権を有し、党派的な利害ではなく「一般意志」を代表するような民主社会だけが正当化されると述べている。戦後75年が過ぎた現在、我々日本人は改めて民主主義について考える必要があるのではないだろうか。

門田守人(昭45)



…その160

2013年8月に国立がん研究センター(NCC)東病院に赴任した。着任したのはよいが、知り合いもなく、ナショナルのなんたるかも知らず病院長に就いたので、本人も当惑したが、周囲はもつと迷惑したのだらう。ただ、「がんセンター」育ちではない者が理事長や病院長に就いた往

時のセンターは、内部だけでは解決できない問題を抱えていたと言つことになる。ビジネス書では組織が危機の時、リーダーは明確なビジョンを掲げ、それに向かつて組織を纏め一丸となつて動かすことが求められる。NCCに求められる仕事に、がん医療の研究開発と政策提言がある。しかし、私は医療開発を指揮したことも無ければ、がん政策に係わつたこともない。このVUCAの時代に皆が納得するビジョンがある訳でもない。まして一家言

を待つNCCの医師に「こうしろ、ああしろ」と言つても、動かない。結果として、進めたい事が一向に進まない。ある時、故郷の竹田城の石垣を眺めながら、「組織を造る」

野面積み(のづらづみ)

面積み」というのがある。自然の石をそのまま積み上げたのだが、コンクリートより耐久性に優れ、新名神高速道路脇の遊歩道はこの石積みで造られている。人は皆、山から切り出した石で、様々な個性や才能、考え方を持っている。それらでこぼこ石を「野面積み」の様に上手く組み合わせ積み上げ、組織を造るのが私の仕事だと捉えた。結果

として、後半に勤めた中央病院は、Newsweek誌の「World's Best Specialized Hospitals 2021」Oncology部門で、日本1位、世界で16位になった。昨年、JCHO大阪病院に赴任したが、ここで野面積みを始めた。中央病院に移る頃、当時、癌研有明病院院長の門田守人先生と一緒に、厚労省や文科省、AMED、PMDAに向向している阪大関係の人材を集め意見交換会(単なる飲み会です)を始めた。同じように東京にいられていた楠岡先生

や平野先生にもご参加頂いた。国のため、医療のために夜遅くまで安い給与で働いている中堅若手の憩いの場となり、横の繋がりになり、普段話する機会もない素晴らしい先達の「知己」を得、励みになればと始めた会である。今回は、国立病院機構理事長の楠岡英雄先生(昭50)にお願いしています。独立行政法人 地域医療機能推進機構 大阪病院 病院長 西田俊朗(昭56)

診	療
科	科

消化器外科

消化器外科が対象としている消化器には、口腔から肛門にいたる消化管の各臓器および肝臓、胆道、膵臓も含まれ、それらの中にはViral Origin (生命維持にかかわる重要臓器)も含まれます。当科では、これらの臓器の腫瘍性疾患(良性・悪性)、炎症性疾患、機能性疾患、さらには臓器不全と移植医療までも対象としており、診療内容は多岐にわたります。このため当科では、消化器全般にわたる幅広い知識や全身管理能力を有する医師を育成するよう心がけており、加えて本邦を代表する大学病院の診療科として最先端の医療が提供できるよう、消化器を上部消化管、下部消化管、肝胆膵という三領域に分け、各医師の専門性も深められる体制を取っています。

2000年の診療科再編により、上記のような幅広い領域の診療が消化器外科という一つの診療科の下で行われることとなり、初代の診療科長として門田守人先生(昭45)が就任され、さらに2008年の外科学講座再編の際に、幅広い領域をカバーしつつ個別の専門性も高めることをめざして、消化器外科を2つの医学部講座が担当することとなりました。森正樹先生(昭55・九州大医)と土岐祐一郎(昭60)による二人の診療科長(兼)講座教授の体制で始まったこの「一診療科二講座制」は、森先生のご異動後、2019年に江口英利(平4)

が着任し、土岐・江口の現体制で続いています。一診療科二講座制ではありますが、実際には単一の診療科/講座のごとく日々の臨床・教育・研究活動をしており、学内および学外より多くの若い先生方が毎年入局してくれているため、大阪大学医学部内で最も医局員数の多い診療科となっています。現在当科では、上記2名の教授に加え、兼任教授7名、准教授2名、講師4名(兼任含む)、助教19名(兼任含む)、医員72名で構成され、阪大病院の100床あまりを担当しています。

昭和56年より我が国の死因の第一位はがんであり、そのうち6割は消化器がんという社会情勢の中で、当科の対象患者も消化器がんの方が大多数を占めています。現在では本邦のがん患者全体の5年生生存率が6割を超えており、がんの根治性に加え「Quality of Life」を重視した治療が求められています。このような社会からの要請をふまえ、当科では以前より腹腔鏡手術やDa Vinci手術(ロボット手術)などの低侵襲手術を積極的に行ってきており、多くのがん

患者に対応させて頂いております。そのような実績を通じて、低侵襲手術の領域で本邦の指導的立場となった複数の医局員が他大学の教授職を拝命し、全国でも活躍しています。一方で、他の病院では対応が困難な高度進行がんに対する外科治療を提供するものも大学病院としての責務であり、他臓器に浸潤した食道がんや大血管に浸潤した膵臓がんに対する拡大手術、複雑に再発した胃がんや大腸がんに対する外科治療を含めた集学的治療なども積極的に取り組んでおり、近隣、遠方から紹介される患者にも対応させて頂いています。また、阪大病院は全ての臓器移植に対応可能な施設であり、当科では肝臓移植と膵臓移植を実施しています。さらに、そのような既存の治療の実践にとどまらず、最良の治療を開発し新たなエビデンスを発信することをめざし、約50カ所の関連施設と共に「大阪大学消化器外科共同研究会」を立ち上げ、多施設共同臨床試験も多数行っています。

現代の消化器疾患診療は、病巣の切除だけでなく、抗がん剤や放射線治療等を駆使した集学的治療、内視鏡治療との連携、そして緩和医療まで幅広い知識や能力が不可欠です。当科では他診療科にもご協力頂きながら、最新・最良の医療を提供できる体制が整っていると自負しています。今後も安全かつ効果的な診療を通じて社会への貢献に邁進したいと思っております。学友会の先生方におかれましては益々のご指導を賜りますよう宜しく御願ひ申し上げます。

土岐祐一郎(昭60)
江口英利(平4)

基礎医学研究としては、がん幹細胞の同定とそれをターゲットとした新規治療法の開発や、マイクロRNAや

